

卒業式 式辞

本日ここに、多数の御来賓の皆様方の御臨席を賜り、平成29年度福島県立湯本高等学校の卒業証書授与式を挙行できますことは、誠に嬉しい限りであります。

高等学校の全課程を修了し、光栄（はえ）ある卒業証書を手にした皆さん、卒業おめでとうございます。そして、この良き日にあたり、お子様の健やかな成長を願い、深い愛情を持って育（はぐく）んでこられました御家族の皆様、心よりお喜びを申し上げます。

また、本校の教育活動に御支援や御協力を頂いた、同窓生の皆様はもとより、地域社会の皆様には敬意と感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

さて、卒業生の皆さんにとって卒業は、クラスの仲間や高校生活と惜別する時ですが、新たな人生に向かってスタートする時でもあります。現在、皆さんの脳裏には高校生活で得た多くの友人との出会い、1年次に開催されたさほ祭、校内球技大会、修学旅行、中間考査や期末考査で苦労したことや部活動での感動など、高校生活を通しての様々な思い出が走馬燈のように次から次へと浮かんでくるものと想像されます。

皆さんが1年次の夏休み前に出された1学年通信を読むと、「鉛筆から手を離すことがないように、しっかりと学習面での「体力づくり」に励みましょう。」、とあるのが私の目に留まりました。これは、園部学年主任を始めとしたクラス担任団の皆さんに対する強い願いが感じられる言葉だと思いました。それは、『学習』つまり学びは、何か特別なものではなく日常生活の一部であり、鉛筆を使っての英語、数学、国語などの学習はもちろん、日常生活での様々な学びを大切にすることですよ。そしてそんな学びが人間としての体力づくりに役立ちますよ。豊かな人間性を創り上げて行きますよ。』、とこの願いが込められていると感じました。

皆さんにとってこの3年間でどうだったでしょうか。私は、皆さんが知らず知らずのうちに多くのことを学んできたのではないかと想像します。

例えば、私が県総体のいわき地区大会のバスケットボールの試合を観に行った時です。I高校との試合は互角の戦いで、湯本高校がリードをすれば直ぐにI高校にリードを許す展開が何度か繰り返されていました。そして、試合時間残り3秒で湯本高校が1点リードされている場面でした。私は、「もうこれは負けだな。」、と思った時です。本校の監督がタイムをかけ試合が中断しました。そして、選手は監督から気合を入れられ（そのように私から見えましたが）試合を再開したのです。すると、試合終了の笛とほぼ同時に本校の生徒が放ったシュートがリングを揺らしたのです。逆転での勝利でした。多くの選手が泣いていたように思います。私も涙がでそうになりました。

皆さんはこの試合を通して、最後の最後まで諦めないことの大切さや、全力でやれば運も味方をしてくれる、と感じたかもしれません。また、こんなに接戦の試合をしてはだめだ、普段もっと密度の濃い集中力のある練習をしなければ、と感じたかもしれません。とにかく、この一試合を通して様々なことを学んだのではないのでしょうか。

ところで、今年度は「君たちはどう生きるか」がヒットしました。約80年前の1930年代に若者に読まれていた物語が、マンガとして現代に蘇りヒットしたものです。悩める15歳のコペル君を主人公として、叔父さんとの交流を通して様々な悩みを抱えながら成長して行く物語です。

同書の中でコペル君の「立派な人間になるって何だろう。」、との問いかけがあります。その答えは、知識をいっぱい持つことでも、立派な仕事に就くことでもありません。正解を相手から示されるものでもないのです。正解は、問い続ける自分の中にあるのです。様々な経験をすることにより自分で見つけ出すべきものなのです。もしかして正解などないかもしれないのです。

この本を通して言いたかったことは、人生において正解などありませんよ。悩み問い続

けることが人生なんだよ、それにきちんと向き合ってください、と教えてくれているのかもしれない。

皆さんはこれから、社会が大きく変革する中で生きていくことになります。AIの進歩により、車の自動運転は当たり前。病気の診断もAIが日常的に行われる時が来るでしょう。しかし、人間は変わりません。誰もが幸せになりたいし、嘆き悲しむのは嫌です。そして、答えを求め続け永遠に問いかけをするのが、人生かもしれません。

最後に、湯本高校での3年間が皆さんにとってかけがえのないものであったことを願い、そして、湯本高校が皆さんにとって誇れる学校であり続けられるような学校づくりを行うことを約束して、式辞といたします。

平成30年3月1日

福島県立湯本高等学校長 二瓶 晃一